株式会社 緑生研究所　http://www.ryokusei-ri.co.jp

緑生丸版

2008.01.01
第十二号

謹賀新年

旧年中は格別のお引き立てを賜り厚く御礼申し上げます
本年も倍旧のご愛顧の程お願い申し上げます
平成二十年　元旦

平成二十年の年頭にあたって

平成二十年というアニバーサリーな年を迎えるにあたって、少し昔を振り返ってみました。思いおこせば、平成元年には「今年はガンバルゾ！」という強い意気込みを持って会社経営に立ち向かおうとしたことを覚えています。それからもう二十年にもなるなんて、歳月の早さにただ驚くばかりです。しかし、それ以上に驚くのは、あの時の意気込みはどこへ消えていったのだろうかということです。平成元年といえば“バブル期”のまっただ中だったので、”泡と消えました”とダジャレてもよいのですが、確かに夢があふれ、将来が薔薇色に輝いていたように思います。

それにしても、平成不況の嵐は依然として「建設業を含めたコンサル業界」を席巻しています。倒産件数も減ってはいませんし、ここにきて増える傾向すら見せています。夏頃までは明るい見通しを語っていた新聞、テレビの論調も、慎重になってきているし、ややもするとこれから悪化していくのではないかという見通しもあって、不安は拭い切れません。

緑生研究所を振り返ってみますと、平成十二年をピークとして以降、売上の減少傾向が続いています。そういった売上の減少に対処して会社においても、人員の削減や経費の節減に取り組みました。人件費を削減し、社員旅行や忘年会などの福利厚生費を切りつめてきました。

でも、最近ふと思い当たったのですが、その時々の景気の荒波に気を奪われすぎて、その先にある自分たちの将来像を見失っていたのではないかということです。”緑生丸”は小さな帆船ですから、油断をするといつ何時転覆するかわかりません。だからといって、その危険に気を取られすぎて、自分たちの行く先を見失っていいわけがありません。船長は片時もそのことを忘れてはいけなかったのです。

そこで考えました。平成二十年からは、社員とともに夢のある会社の未来像を描きながら、そこへ向かってみんなで力を合わせて操船していこうと。

平成二十年をその元年にしたいと思います。

しかし、ちょっと待ってください。その肝心な”会社の未来像”なんですが、まだ、お話しできる状態になるまで煮詰まっておりません。暮れから正月にかけて、少し時間を取って熟成したいと考えています。正月明けには皆さんにお示しできるようにしたいと思っています。乞うご期待ということです。

ということで、平成二十年は新しい”夢”と“目標”を掲げて、それに向かって着実に歩を進めていきたいと考えています。

“辛くとも未来をつなげ緑生研”

どうかよろしくお願い申し上げます。

代表取締役
井上　康平

※ 裏面もご覧下さい。

〒182-0026 東京都調布市小島町 2-40-10 桐生ビル２Ｆ
TEL:042-499-7211（代表）　FAX:042-487-4334

平成二十年・生物技術者にできること

新年あけましておめでとうございます。本年もお引き立ての程、よろしくお願い申しあげます。

平成の時代も、はや二十年を迎えました。昭和の時代には、二十年に終戦という大きな節目・変換点がありました。そのため自然と平成の時代はどうなのかなと、「20」というキリのいい数字以上に意識して見てしまいます。

平成の時代を迎えた頃、生活に密着した話で言えば、消費税はまだ導入されていませんでした。東京近郊には、カラフルな箱形の国電が走っていました。

生きものに目をやれば、昨秋にやたら目についたツマグロヒョウモンという蝶はまだ関東では見られなかったし、外来植物のマツバウンランやナガミヒナゲシは目立ちませんでした。その一方、上野公園不忍池を始め都市公園の池では、今よりもっと多数のカモ類が越冬していました。

こうしてこの二十年、身近な生きものの世界には、結構多くの変化が見られたように思います。そうした変化のすべてが、今声高に言われている地球温暖化を始めとする、人為の影響によるものなのでしょうか。

先日、ナチュラリスト松田道生氏の書かれた『カラスはなぜ東京を好きなのか』を読みました。都市のカラスを通じて体感された、野生生物との接し方に感銘を受けました。この本の中にもありましたが、多くのマスコミがそうであるように、人々はセンセーショナルなものや、単純な対立の図式のようなおもしろいものを求めます。そのような主観や偏見に囚われず、今都市で、今この国で、今この地球で、生きものの世界がどうなっているかを正確に把握し、それが何によるものかを冷静に正確に検討すること。それがこの平成の世、危機的な状況にあると言われる二十一世紀を生きる、われわれ生物技術者に課せられた任務ではないかと感じています。

このような意識を持ちながら、自然への感性と生物技術を一層研ぎ澄まし、社会へ貢献していく所存です。

取締役
田中　利彦

アンケートのお願い！

Q.「緑生瓦版」のなかで取り上げてほしい内容や、ご意見、ご感想などを教えて下さい。

（　　）

差し支えなければ、会社名、所属、氏名をお教え下さい。

会社名：　　**所属：**　　**氏名：**

ご協力ありがとうございました。
恐れ入りますが、アンケートの回答は、緑生研究所（坪山）宛に FAX（042-487-4334）でお願いいたします。

編集後記

お読みいただき、ありがとうございました。

第十三号は、「デコポンの日」、三月一日の発行を予定しています。

特集では、異動などがありましたので、スタッフの所属等を改めて紹介させて頂きます。

コラム

神社に出かけることが多くなるこの時期、狛犬を目にする機会もふえるのではないでしょうか。

京都の大豊神社や大阪の大国神社では狛犬ならぬ「狛ねずみ」を見ることが出来ます。魔除け、厄除け、家内安全…狛ねずみには、どんな御利益があるのでしょうか。

寒い季節ですが、ちょっとした発見を探しに出かけてみてはいかがでしょうか。

Tu